

平城京右京五条四坊三坪  
発掘調査概報



1977.3

良國立文化財研究所

## 目 次

I 調査の経過 .....	1
II 調査のあらまし .....	2
III 検出遺構 .....	4
1. 条坊遺構 .....	4
2. 建物 .....	6
3. 井戸 .....	8
IV 遺物 .....	10
1. 土器 .....	10
2. 藏け器と副葬遺物 .....	12
3. 瓦類 .....	14
4. 木製品 .....	15
5. 石製品 .....	15
V まとめ .....	16

## I 調査の経過

この報告は奈良市平松町312—387番地と五条町812—880番地にまたがる地内に奈良市が計画した仮称第13中学校建設予定地の発掘調査に関するものである。

奈良市西南部ではここ十数年ほどの間に宅地化が進み、児童生徒数が急激に増加したため、2～3年前から中学校をこの地に新設する計画がたてられていたが、地元との話し合いがまとまり、昭和52年度の開校を目標としてこの事業が51年度中にはじめられることになった。

建設予定地は平城京右京五条四坊三坪を中心とする地域にあたり、丘陵地であるが今日の地割にも条坊痕跡を部分的にとどめるところである。これまで公共機関による平城京内の大規模な開発事業については奈良県教育委員会文化財保護課の行政指導によって事前の発掘調査がいくつかおこなわれ、貴重な成果をあげてきた。県とも協議の結果、調査は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が奈良市からの依頼で行なうこととなり、7月に関係者間で、経費、方法、期間等についての話し合いを重ねて調査計画がまとめられた。敷地は中央部に南から谷が入りこんでいるため、やや高い北及び西方の丘陵部を約80cm削って全体をほぼ平坦にならす計画で、整地後は台地上の遺跡は消滅することが明らかであった。一方、工事の開始は進入道路の整備をまって10月初旬と予定されており、調査の期間は約2ヶ月の余裕しかなかった。そこで調査の重点を台地上の平坦部におき、条坊と住居遺跡の存在が予想される箇所だけに限ることとした。樹木の伐採、電線敷設、器材搬入などの準備段階を経て昭和51年8月19日に調査を開始し、10月8日に終了した。調査対象面積は31,122m<sup>2</sup>であり、このうち2,360m<sup>2</sup>について発掘調査をおこなった。



第1図 発掘区周辺条坊復原図 斜線部分が右京五条四坊三坪 (奈良県遺跡地図による)

## II 調査のあらまし

発掘調査地は、いわゆる「西の京」の一画にあたり、奈良盆地西部の比較的起伏に富んだ丘陵地（盆地との比高=20m前後）にあって、西南から谷が入りこむ谷頭部分である。谷筋をふくむ一部と西南部分の傾斜面の他は水田である。

調査地は平城京発掘地帯によって6AGQ地区とした。調査は桂畔に部分的に残っている条坊痕跡をもとにしてA～Hの発掘区を設け、F・G地区を主な調査対象とした。

**A・B・Mトレンチ**：調査地区でもっとも広い平坦地であるが、10cm程の表土直下で黄色の地山となり、建物・堀・井戸を検出した。しかし、平坦部の東半ではほとんど遺構ではなく大部分は後世の削平を受けているらしい。

**Lトレンチ**：Aトレンチの西にあたり、2m程低い谷頭部分である。表土、暗褐色土(50cm)、灰褐色土(15cm)、黄褐色地山の順に堆積土があり、地山は南に下降する。灰褐色土上面で建物、井戸、墓壙などを検出した。

**Dトレンチ**：推定小路の交叉部分で、現状は平坦地であるが地山は南東方向に下降しており、近世の遺物を含む灰褐色土で整地されている。地山面で土壤等を検出した。

**C・Eトレンチ**：Dトレンチの東側の二箇所に設けたが、いずれも東に続く傾斜する地山面を確認するにとどまった。

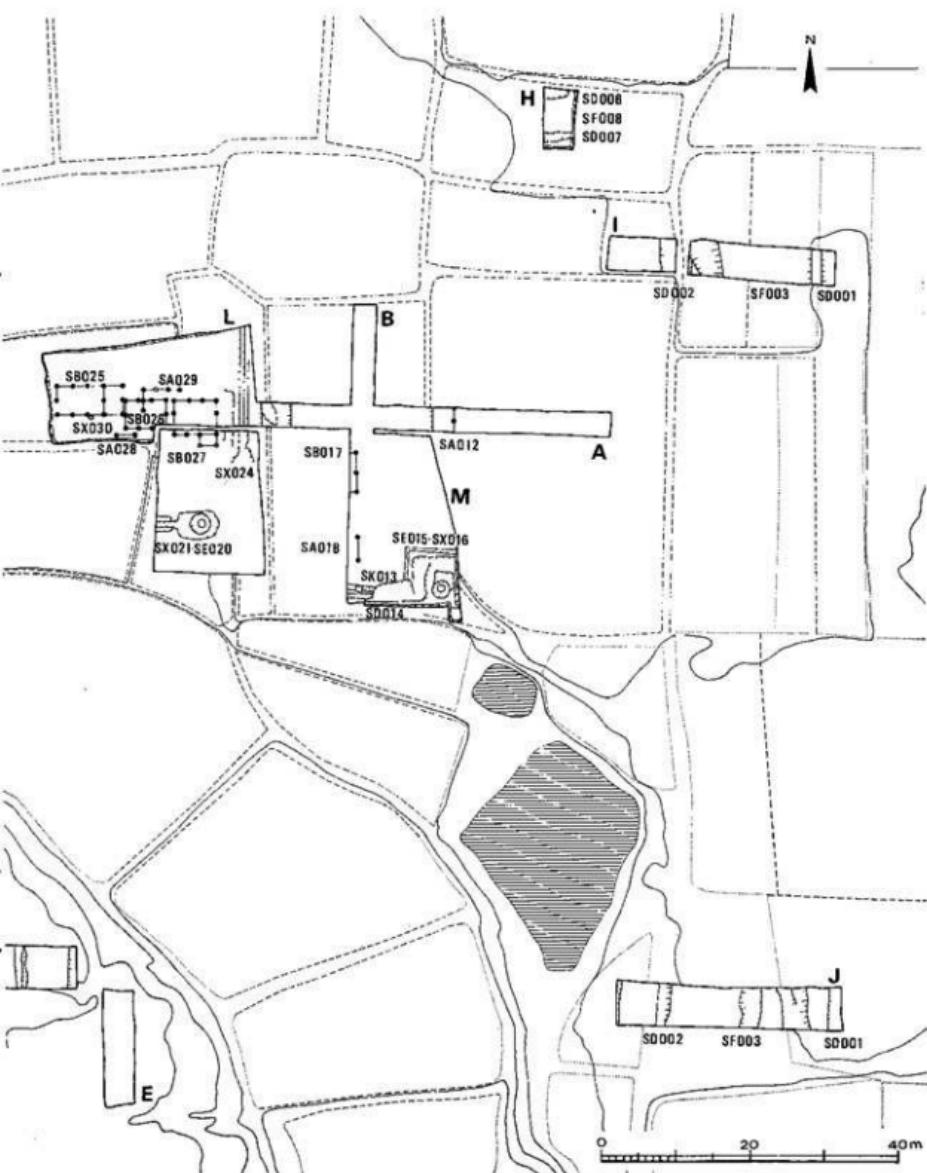
**Gトレンチ**：谷頭の平坦地で、Lトレンチの土層と連続する面での建物の柱穴を検出した。地山面は東西方向はほぼ水平で、南に向ってゆるく下降する。

**Fトレンチ**：推定南北小路位置にあたる。中世遺物を含む灰褐色土が東側に厚く、地山は谷に向って急な傾斜を示す。地山直上の暗褐色土面に南北溝、柱穴、石組暗渠を検出した。

**I・Jトレンチ**：推定三坊大路の位置にあたる。両トレンチの東端に連続するとみられる南北溝を検出した。なお、Iトレンチには暗褐色遺物包含層が全面に広がっていた。

**H・Kトレンチ**：推定東西小路にあたるが、表土、暗褐色土遺物包含層、暗褐色地山の順で堆積土がある。Hトレンチでは地山面で、平行する2条の東西溝を検出したが、Kトレンチではとくに遺構はなかった。





第2図 6AGQ・FG地区 施設構造図

### III 検出遺構

今回検出した主な遺構は、西三坊大路、五条条間路、南北小路、側溝5条の条坊遺構と坪内の建物6棟、塀5条、井戸2基、上壙などである。以下、条坊遺構、建物、井戸について記述する。

#### 1 条坊遺構（第3図、図版2・3）

平城京右京における条坊遺構はこれまで西隆寺、唐招提寺などで一部検出したにとどまっていたが、今回の調査で2、3の知見を得、とくに丘陵部の条坊遺構を発見したことは京条坊復原に重要なより所となろう。調査地が右京五条四坊三坪の全域を包括するため、坪の四周にトレントを設定し、予想位置に西三坊大路、五条条間路、七坪と三坪の間の小路の痕跡を確認できた。

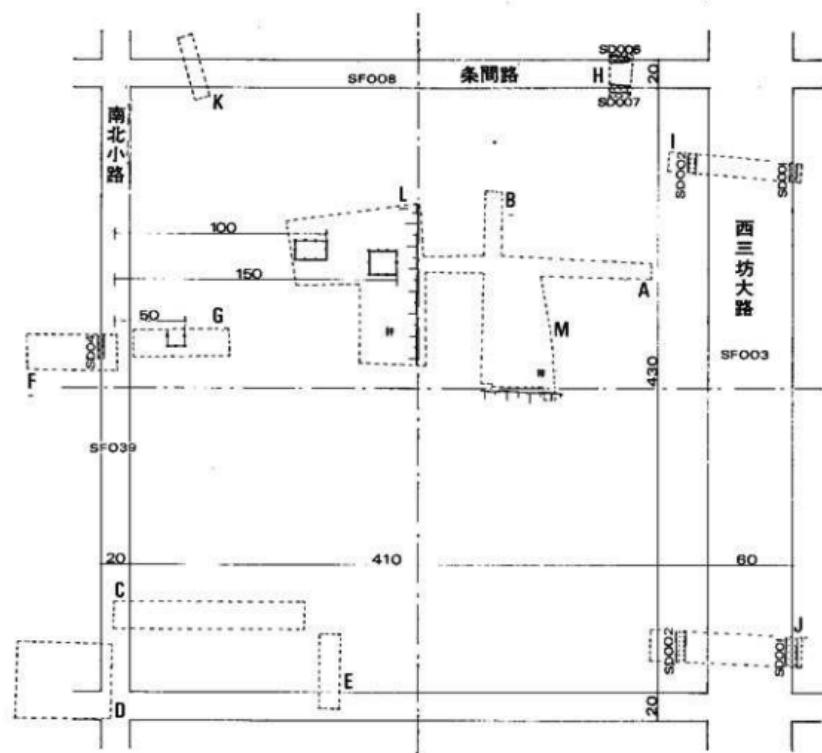
**西三坊大路SF003** I、J両トレント東端に幅1~2mのSD001を、西端に幅1.7mの溝SD002をそれぞれ検出した。両溝を大路側溝とすると、心々距離がJトレント78.5尺(23.24m)、Iトレントで73.75尺(21.83m)となり、溝心々で推定大路幅60尺より広くなる。SD001の方位は国土地理院方眼北に対してN15°50' Eとなり、SD002はN1°03'21" Eとなる。後者の振れは大きいためしばらくおき、前者について考えてみたい。SD001を大路東側溝と仮定して、溝心より30尺（推定大路幅）西の位置を大路心とすると西三坊大路心から朱雀大路心までの計測値1601.93mを得る。この値を朱雀大路の調査で明らかにされた平城京の方位N0°15'41" Wで換算（以下の数値は同様の方位で換算）すると1600.052mとなり基準尺0.296で除すと5405尺(≈3×1800)となり、1800尺の基本方眼地割りにはほぼ一致することが明らかになった。

**条間路SF008** Hトレントで幅1.2mのSD006と幅1.1mのSD007の両側溝を検出した。側溝心々距離20.16尺(5.97m)となり、従来検出されている小路と同じ値を示す。条間路は小路より広く4~8丈と推定されているため、今回検出の2本の溝が条間路の両側溝を示すものか今後の調査が必要であろう。この条間路心と平城宮西南面南門心を計測すると1594.643mを得、基準尺0.296mで除すと5387.3尺で、基本方眼地割り5400尺に対して12.7尺北に寄っていることが判明した（唐招提寺講堂修理工跡確認の小路計算からは131.62m(444.6尺)で5尺ほど北寄り）。これは施工誤差か東西軸線の振れによる影響と思われる。なお、Kトレントでは両側溝とも削平されていた。

**南北小路SF039** Fトレントでみると、SD004が前述の西三坊大路心より135.973m(459.36尺)の計測値を得、坪計画寸法450尺+10尺（小路幅）460尺の近似値を示し、この溝に流れ込む暗渠S X041、近接して建つ建物SA042と関連して西小路西側溝と考えられる。

なお、南北小路についてはE、D両トレントとも、後世の攪乱のため確認出来なかった。

以上、三坪の条坊について検討したが条坊の地割痕跡が残る東、北、西については道路側溝の一部が確認出来た。これらを基に坪の中軸線を求める第3図のように、三坪の地形の東西、南北方向に段差が出来る部分にそれぞれ中軸線が位置する。また後述するように建物の柱通りが坪計画の完数尺に位置することが判明した。これらのことから平城京崩遷部に於ても、緻密な条坊制の施工、条坊内の宅地割が行われたものと思われるが、今回の調査は一部に過ぎず、今後の調査によって更に資料が増加することが望まれる。



第3図 右京五条四坊三坪の占地（数値は尺）

地 点 名	X	Y	備 考
朱雀大路心	-147833.000	-18577.850	「平城京朱雀大路発掘調査報告」
朱雀門心	-145994.500	-18586.320	平城宮16次調査
西面南門心	-145753.390	-19093.310	平城宮15次調査
西三坊大路心	-147424.000	-20179.785	平城宮100次調査
唐招提寺講堂東西小路	-147218.000	-19438.000	「国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書」
五条条間路心	-147353.135	-20208.000	平城宮100次調査
二条大路心	-146018.180	-18586.320	平城宮16次調査 朱雀門心より80尺南

条 間 運 計 測 座 標 表

## 2 建物(第4・5図、図版4・5)

検出した奈良時代の建物はLトレンチ3棟、Mトレンチ1棟、Gトレンチ2棟の計6棟である。他に建物に関連した解3条がある。建物はいずれも小規模な掘立柱建物で、発掘面積に比して棟数も少ない。建物には重複関係や方位の異なるものがあり、A、Bの2時期に分れる。

A期は平城京造営方位にそったもので、S B025-027・035・S A028・029がある。

**SB025** Lトレンチ北西部にある桁行4間(8.78m)、梁行2間(3.94m)の東西棟建物で東妻廂をもつ。西妻廂は調査地区外のため不明である。柱間は梁行が南間6尺北間7尺で、桁行が身合7尺等間、廂の出8尺である。なお、南面中央側柱掘形に接して、墓壙S X030を検出した。

**SB027** S B025の東側にある桁行3間(5.65m)梁行2間(4.65m)の東西棟建物である。南面東端1間に廂が取り付く。桁行は6尺等間であるが南面では廂の付く東端間をわずかに広くする。梁行は北間6尺、南間9尺、廂を5尺とする。なお、S B027の北部をL字形に西する南北2間(3.1m)東西3間(4.6m)廂S A029と南側柱の西延長線上に1間の解S A028がある。

**SB035** GトレンチのS B034と重複する梁行3間(4.88m)の西面廂付き南北棟建物である。桁行は南側1間分(1.83m)を検出した。柱間は桁行が6尺で、梁行が身合6尺等間、廂4尺である。身合の南西隅掘形の柱位置には塙が認められていた。

B期は平城京造営方位より北で西へ0.5-2度振れたもので、S B017-026・034・S A018がある。

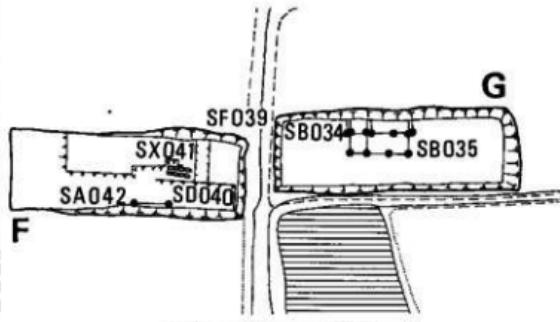
**SB017** Mトレンチ西端にある梁行2間(2.16m)の東西棟建物で、東妻側柱を検出した。梁間は9尺等間である。なお東妻側柱の南延長線上に20尺離れ南北1間(3m)の解S A018がある。

**SB026** S B025とS B027の間にある桁行3間(5.51m)梁行2間(3.82m)の東西棟建物である。柱間は桁行、梁行ともに6尺等間である。

**SB034** GトレンチS B035と重複した梁行3間(4.88m)の西面廂付き南北棟建物で、南妻側柱のみを検出した。梁行は身合が6尺等間、廂が7尺である。

そのほかAトレンチで南北1間(約2m)の柱列S A012、Fトレンチで東西1間(約3m)の柱列S A042を検出した。なお、宅地として最適地であるS E015を中心とした高台からは1棟の建物を検出したのみ

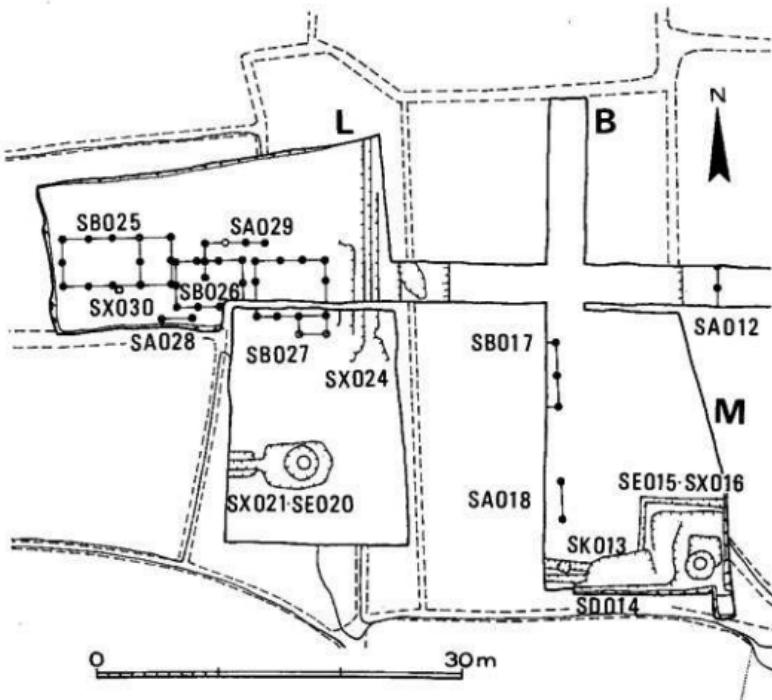
であった。しかし遺構面が現地表から20-30cmと浅く、後世の開墾によって中心部が削平された可能性が強い。遺物が高台の西斜面から二次堆積で多量に出土することからも裏づけられよう。



第4図 F・Gトレンチ遺構図

**建物の年代** 建物は前述したようにA、Bの2期に区分されるが、建物の存続年代を明らかにする遺物はいずれの柱掘形からも出土していない。しかし、建物周辺から出土する土器は平城宮Ⅰ期（710年頃）から平城宮Ⅲ期（750年頃）のものであり、建物に付設した井戸S E020の廃絶期を示す土器もⅢ期のものである。これらの事実から、その存続年代は、平城京造営とともにじまり8世紀後半にはすでに居住空間としての機能を失ったものと考えられる。また、SB025に接して検出された藏骨器は建物が廃絶した8世紀後半に埋納されたものであろう。

**宅地割り** 三坪は東南から中心部に向って谷が入り込んだ起伏のある地形となっている。こうした地形的な制約のため建物は主に坪の北半部にみられ、谷を南に見渡して建てられている。建物は大きく2つの地域に分れる。すなわち、L、Gトレントを含む標高77m前後の谷頭のゆるやかな傾斜地と、その東に階段状遺構SX024を境としてひろがるA、B、Mトレントを含む標高80m前後の平坦地の2地域で、それぞれに井戸SE015とSE020をもつ。階段状遺構SX024は坪の東西心にあり、また南北心を境として宅地と谷筋に分れる。したがって、地形的な制約を受けながらも、大きな宅地割りとして14町以下で一つのまとまりを持つ傾向があるといえよう。



第5図 A・B・L・Mトレント遺構図

### 3 井 戸 (第6図、図版6)

台地上のMトレンチで方形の階段状遺構S X016を伴う井戸S E015と、この地区より1段低い谷頭のLトレンチでS E020とその付属施設S X021を検出した。

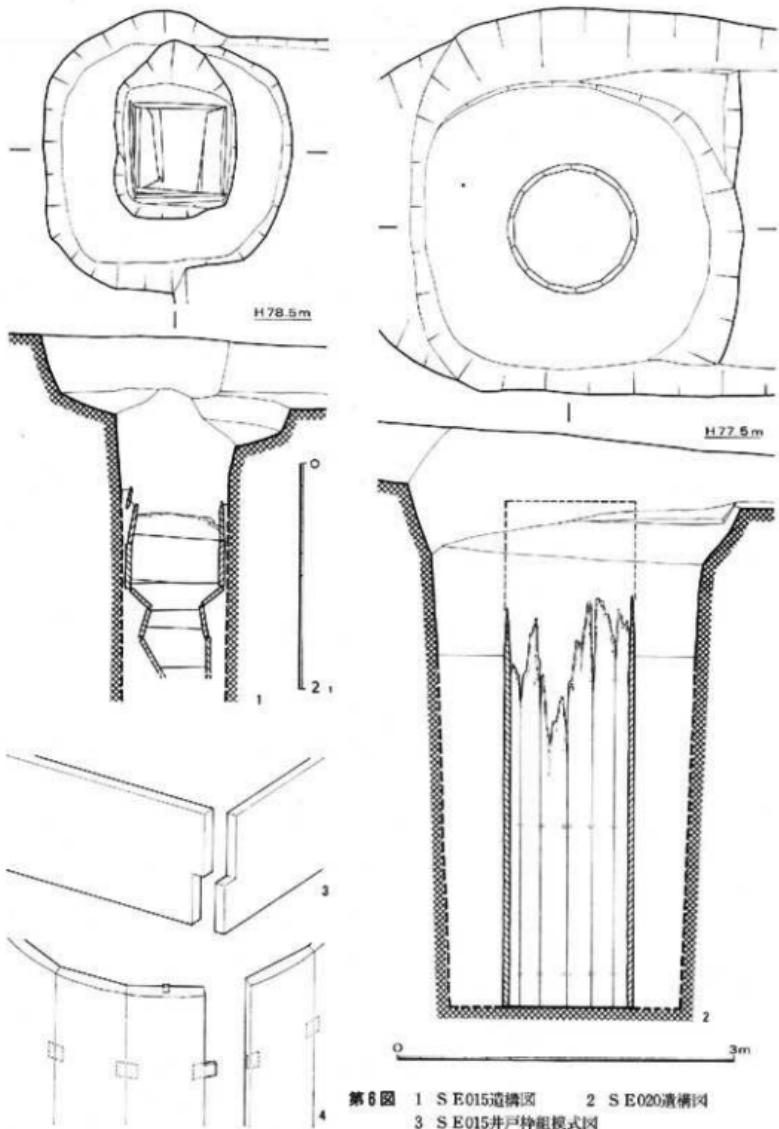
**S E015・S X016** S E015は一辺0.8mの井籠組の井戸である(1)。枠板は長さ90cm、厚さ5cmで、材の対角になる二隅を切り落して仕口とする(3)。材の幅は各段で異なり28cm~40cmで、6段目まで確認した。掘形は2段につくられ、上段が一辺2.1mの隅丸方形、下段が一辺1.1mの不整形である。井戸の深さは上段の掘形から約3mまで確認したが、それ以下については、検出時に崩壊したため、細部は不明である。

S X016は、S E015の周囲を四段に掘込んだ遺構である。井戸を深く掘り下げるために階段掘りした結果であろうが、井戸構築後は、最下段を埋戻して洗場とし、上三段に周溝を掘り、井戸に降りる際の階段として整備したものと考えられる。南西部は上塙S K013、S D014によって破壊され南側は未検出であるが、全体のプランを復原すると次のようになる。計4段に掘込んだ第1段目は一辺8.6mの正方形となり、深さ0.6mである。第2段は第1段の底の周囲0.6m~0.8mの平坦面を残して掘込んでいる。一辺6.4mの正方形となり、深さ0.4mである。第3段は第2段の東部に片寄せて掘込む。長さ6.7m、幅4~4.8mの長方形となり、深さ0.5mである。以上の3段には壁ぎわに沿って幅0.1~0.2mの溝が巡っている。第4段は第3段のはば中央を掘込んでいる。一辺2.8mの正方形となり、深さ0.5mである。井戸の掘形はこの最下段の掘込みの南部を切り込んで設けられており、S X016の中心から東南方向に1.4mずれた位置にある。

S E015から出土した遺物は少ないが、S X016からはかなりの量の土器が出土した。これらの遺物及び遺構の状態からみて、S E015・S X016は構築後比較的早い段階で崩壊し、廃棄されたようである。その時期は、遺物から8世紀前半と考えられる。

**S E020・S X021** S E020は径1.1mの円形継板組の井戸である(2)。井戸枠は、幅28cm、厚さ6cmの細長板材14枚を縦に組んでおり、各板は上中下の3箇所を釘孔で固定する。枠材は円形に組むために両側辺を鋸角につくり、外面を中高に削り曲面にしている。枠材の高さは2.6~4.1mであるが、井戸内には同丁の板材が計6枚落込んでいた。残長1.1~1.9mで、木口から25cmの位置に柄孔がある。この板材を転落した井戸枠の上部とすると枘穴の間隔から、高さ4.5mに復元できる。また6枚のうち2枚には木口面に幅2cmの枘がある。おそらく円形の井戸枠の上に方形の枠を組み、それを4箇所で固定した枘であろう(4)。なお落込んだ板材の1枚には外面上部に「木」の刻字があった。掘形は2段になり、上段は長辺5.4m、短辺3.2mの不整な長方形で下段は一辺2.5mの隅丸方形である。井戸の深さは、掘形上面から約5.1mである。

S X021は、S E020の上段の掘形内にある長さ1.5m、幅3.2mの平坦面と谷側に向って下降する幅0.3mの溝状遺構である。これらはプランからも埋没の状況からもS E020と併存するものであり、井戸に付属する洗場とその排水溝と考えられる。この洗場は井戸枠上端と推定した位置からわずか10cm低いのみであるが、方形の上枠が考えられるので井戸枠との比高差は充分であろう。S E020・S X021からは、土師器、須恵器のほか若干の木製品が出土した。これらの遺物から、S E020・S X021の廃絶の時期は8世紀中頃と考えられる。



第6図 1 S E015遺構図 2 S E020遺構図  
3 S E015井戸枠組模式図  
4 S E020井戸枠組模式図

## IV 遺物

今回の調査で出土した遺物は、瓦塊類、土器、木製品、古墳時代の鏡形石である。遺物は遺構の密度が低いためか、全体に少ない。

### 1 土器（第7・8図、図版8）

井戸S E015・S E020・S X016、土壙S K013・S K052・S K055、溝S D010・S D014・S D022・S D040及びS X030から土師器、須恵器が出土した。時期的には奈良時代初頭から奈良時代末葉に属するが、奈良時代前半の遺物が多くを占めている。土師器は井戸S E020から出土した甕およびS K013出土の盤の2例を除いて、保存状態が悪く、細部の技法については不明な点が多かった。

**土壙S K013・溝S D014出土の土器（10・11・14・26）** 土壙S K013は井戸の付属施設S X016との重複関係から、井戸S E020より新しいことがわかる。土師器には杯、杯蓋、高杯、碗、皿、壺、甕、須恵器には蓋、杯、壺、鉢、甕、瓶の各器種がある。時期的には23、24のような8世紀初頭のものから、26、27のように8世紀中頃の土器が含まれている。18は二個把手のついた碗で、珍しい形態である。16は内面に暗文のつく皿であるが、暗文の様子は判然としない。底部外面には指頭痕がみられる。17は底部内面に螺旋暗文のつく皿であるが、16同様に器面が荒れている。

溝S D014は、土壙S K013が埋まったあとに作られた溝である。出土の土器（10・11）はS K013とはほぼ同時期のものである。土師器杯（10）の内面には一段放射状暗文+螺旋暗文がある。

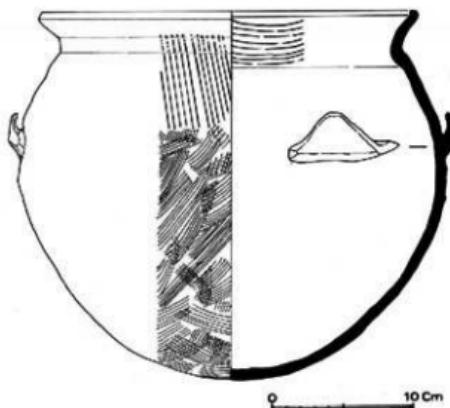
**井戸S E020出土の土器（3・13）** 井戸S E020の上部埋土からは、3の須恵器蓋のように奈良時代末葉の土器も出土するが、土師器甕（第7図）や13の須恵器盤のような、8世紀中頃を若干下る年代の土器が主体をしており、これらが井戸の廃絶期を示すものと思われる。なお、甕の口頸部には藤蔓が結んである。底部は煤の付着が著しい。

**Dトレンチ出土の土器（4-9）** Dトレンチでは土壙S K052とその周辺からまとめて出土した。

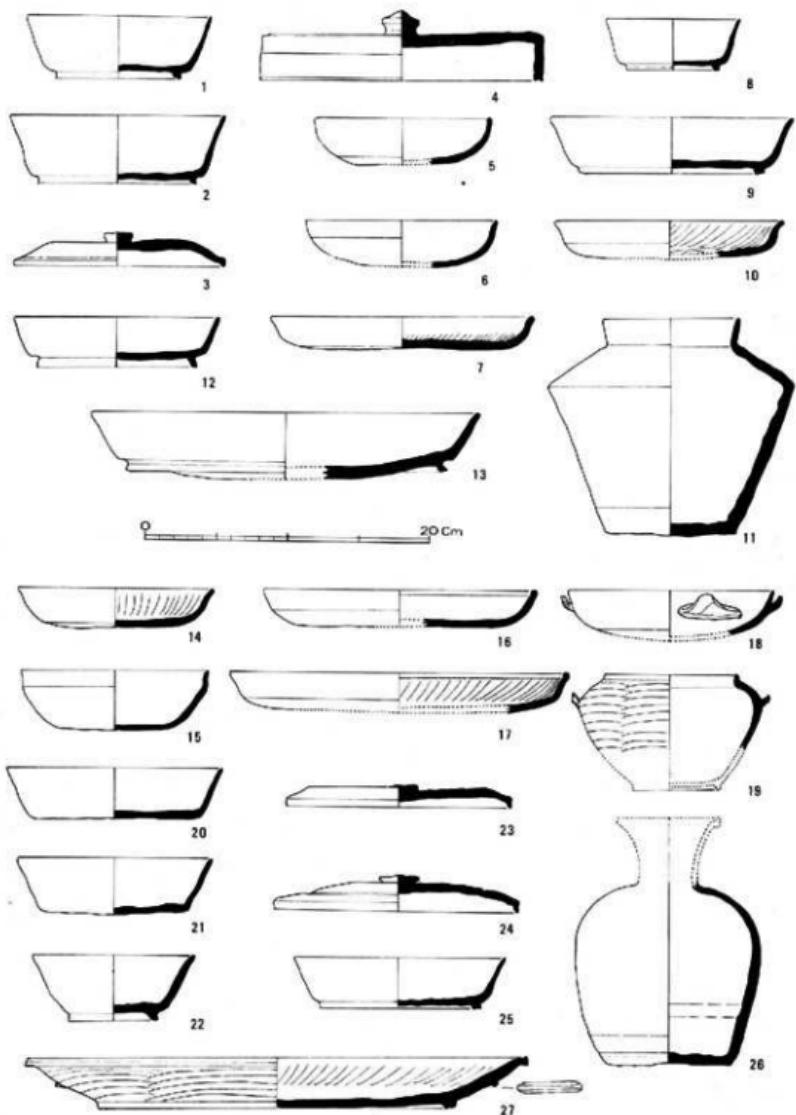
S K052出土の土師器杯7、碗（5・6）はb手法で作られており、また須恵器蓋4は、しっかりとした宝珠つまみをもつ古い形態をもっており、奈良時代前半の時期とみることができる。なお杯7は器面剥落がはげしいが、二段の放射状暗文が施されると考えられる。

**階段状造構S X024出土の土器（1・2・**

12）須恵器では杯（1・2・12）があるが、土壙S K052出土の土器とはほぼ同時期である。なお、土師器には、皿、碗、高杯、壺、甕の各器種があるが、いずれも小破片のため省略する。



第7図 井戸 S E020出土 土師器甕



第8図 1.2.12 S X024出土土器 4 ~ 7 SK052出土土器  
 10. 11 SD014出土土器 3. 13 SE020出土土器 8. 9 Dトレンチ出土須恵器  
 14~27 SK013出土土器

## 2 蔵骨器と副葬遺物（第9・10・11図、図版9・10）

蔵骨器と副葬遺物について述べるまえに、火葬墓 S X030 および遺物の出土状態について述べる。墓壙は建物 SB025 の柱掘形と一部重複してみつかったが切り合が僅かなため新旧の断定はむずかしい（第9図）。しかし、建物の廃絶期や蔵骨器の時期から、墓壙が新しいと考えられる。

墓壙の上面は後世の削平を受けているが、一辺 0.4m の隅丸方形で、下方に向ってせばまり円形になる。深さ 0.5m で、壙底に蔵骨器が直接納置されていた。蔵骨器と壙面との間には隙間はほとんどなく、埋土は暗褐色粘質土が均一な状態に入っていた。墓壙に接して浅い凹みに安山岩質の割石が一個あった。墓壙の上面を覆っていた石材とみられる。蔵骨器は発見時には蓋が密着し、器内に透明の水が満ちており、なかに墨、筆管、和同開珎が入っていた。また底には泥状の沈澱物があり、微小な骨片と織物（綿）が認められている。

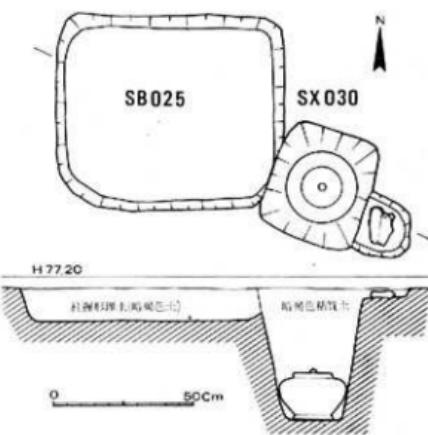
**蔵骨器（第10図）** いわゆる薬莢形の須恵器である。わずかに外反する口縁につづく胴は横に強く張り、やや外反する高台を持つ。外面は口縁から胴上半にかけてロクロ彫で、下半部は横方向へのラミガキをする。底部外面はヘラケズリで、内面底部はヘラケズリした後に撫でを施す。色調は青灰色を呈し、黒斑が認められる。胎土中には細砂と大粒の長石が入る。

蓋は平坦な頂部と宝珠形つまみを持ち、口縁部は直立する。つまみと頂部は撫での後にヘラケズリを加える。口縁部は内外ともに撫である。口縁端部には深いヘラケズリの沈線がめぐる。

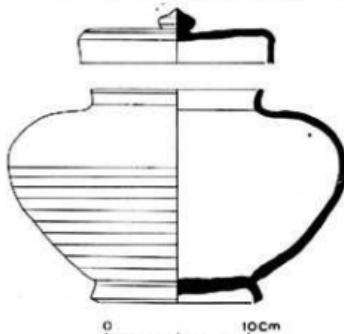
色調はやや茶色がかかった灰色を呈し、胎土中には砂粒が入る。

なお、蓋の肩には蓋をかぶせて焼成した色変が認められるが、この蓋の径と異なることや胎土・色調が異なることから蔵骨器に使用する際に別物を捕えたものとみられる。壺は口縁の外反のようす、胴のヘラミガキ、高台のつけ方などの特徴からみると平城宮二期（750年頃）の土器に該当し、蓋はこれよりやや遅る時期のものと考えられる。

壺は高さ 15.5cm、口径 12.1cm、底径 1.12cm、最大径 15.5cm。蓋は直径 12.8cm、高さ 3.8cm。



第9図 火葬墓 S X030横構図



第10図 火葬墓 S X030出土 藏骨器

**墨挺（第11図3）** いわゆるカラスミ形をした墨である。丸棒状に練り上げたところに型押して片面の中央部を窪ませて截頭舟形につくり出したもので、下面は長軸にそってやや内反りの曲面をなす。表面は細い鉄筋状の裝をしている。二片にわれていたが使用された痕跡はない。正倉院伝世の墨と同形品であるがやや小さい。永い間水中にあったとみられるにも拘らず原形を保っていたのは珍しいことといえよう。

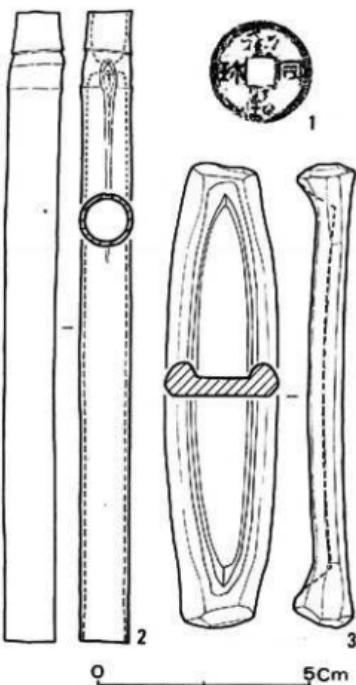
全長10.9cm、最大幅2.7cm、最大厚1.4cm、側縁部厚0.8cm、凹部厚0.45cm、乾燥時の重量13.1g。

**筆管（第11図2）** 一端近くに節を持つ長さ14.9cm、直徑1.2cmの竹管である。節のない側に筆毛をとりつけたらしく、端部内縁に刃物で削りを加えて内径を広げている（内径1.0cm）。節のある側は切り落しのままで、とくに加工はない。表皮には斑文などの特徴はなく、普通の一種かとみられる。

**和同開跡（第11図1）** 全部で4枚あるが、3枚は器底に接着している。うち1枚は背面を上にしているが、大きさ、形状は他の3枚と等しいので和同開跡とみて誤りないと想われる。3枚はいずれも一般に新和同とする型式で、とくに錢文に特徴はない。いずれも保存状況は悪く、重量をふくめて計測できるのは2枚のみである。

国示したものの数値は外径2.48cm、内郭内径0.66cm、外郭厚1.38mm、内郭厚1.15mm。

以上、今回検出した火葬墓について述べたが、火葬墓がつくられたのは、この地域が宅地として使用されなくなった奈良時代中頃以降に属するが、藏骨器および副葬遺物から判断して、京の廃絶以降には下らないと考えられる。そうだとすれば、京内に於ける奈良時代の火葬墓としてははじめての例である。京周辺の火葬墓の例としては、奈良市秋篠町、西山、押熊の3つが知られている。西山の火葬墓は、土師器壺に直接埋納されたものらしく、中に和同開跡2枚が入っていた。押熊の火葬墓は須恵器壺の中に土師器高杯があり、これに把手つきのかぶせ蓋のある土師器壺がのっていたようである。いずれも奈良時代とみられる。また、佐保山、高円山などの京北、京東の地で火葬した史料がいくつかあることから、京城をはずれた奈良山丘陵、春日、高円山周辺が葬地となっていたようである。しかし、これらはいずれも京の周辺であり、今回のように京の西辺部とはいえ、明らかに京内に墓が営まれたとすれば、喪葬令の規定（「凡京都及道路側近並不レ得、葬埋」）との関連が問題になろう。



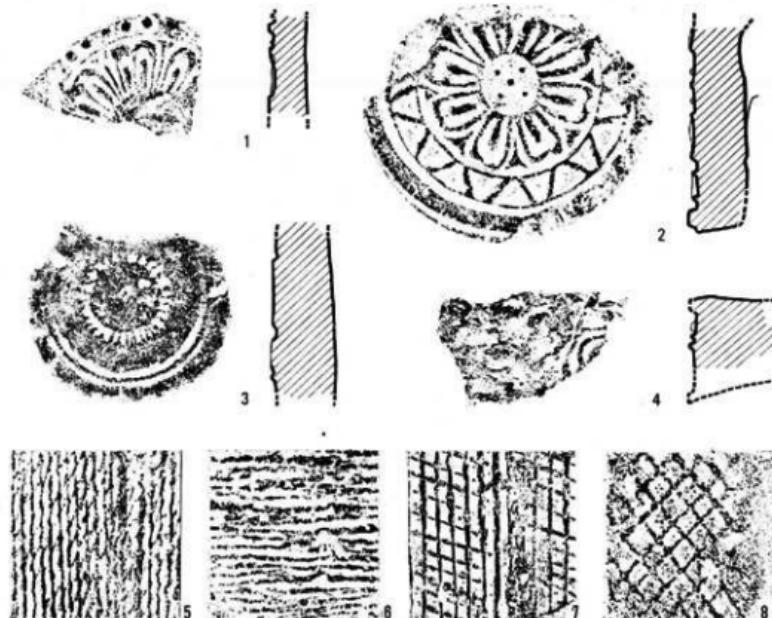
第11図 1.和同開跡 2.筆管 3.墨挺

### 3 瓦塊類（第12図、図版11）

瓦塊類は軒丸瓦4点、軒平瓦1点、若干の丸平瓦、塙2点である。出土量は極めて少ない。丸平瓦はSD001の付近から比較的集中して出土する傾向が認められたが、他はいずれも遺構との関連で出土したものではない。

1は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に珠文を二重に配する7世紀末葉の瓦である(6275型式)。2は單弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に大きな鋸歯文を、外区に幅広の突帯をめぐらす。瓦当面は平坦で、一見すると地方的な瓦当文様を呈している。同例は平松庵寺、横井庵寺で出土しており、奈良時代後半の瓦と考えられる。3は蓮弁、中房ともに磨滅がひどく、その文様は不明であるが、中房が突出していることから、平城宮跡出土の複弁8弁蓮華文軒丸瓦6304型式であろう。軒丸瓦はこの3点のほか近世の巴文軒丸瓦が1点出土している。4は今回出土した唯一の軒平瓦である。小片のため、上外区の珠文と内区の唐草文の一部が判明するのみである。

丸平瓦は、やや厚手で軟質の赤褐色を呈するものと薄手で硬質の灰色を呈する2種があり、他に7世紀末葉のものや巴文に伴うものが若干出土する。平瓦の叩き目は、繩叩き横位・綫位、格子目のものがある(5~8)。格子目叩き目は宮内出土の軒丸瓦6135—軒平瓦6688に伴う丸平瓦にみられるものと同種である。他に長方形塙が2点出土している。



第12図 軒瓦および平瓦叩き目

#### 4 木製品 (第13図、図版11)

S E015・S E020から奈良時代の木製品10余点が出土した。S E 020出土の木製品には、曲物8点のほか刀子柄1点がある。いずれも井戸底からの出土。

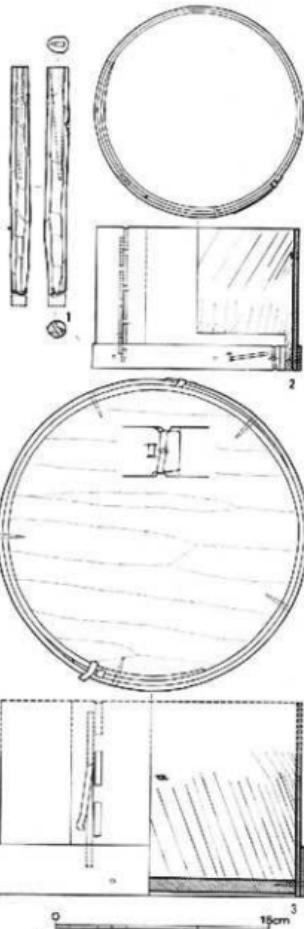
**曲物（2・3）** 2は径14.2cm、高さ9.9cmの容器の身であるが、底板を欠く。下端に幅1.7cmの縁を巻き、6箇所に木釘を打込む。側板は内面に斜めと縦の刻線をいれて曲げ、重ね部分の両端2箇所で撫皮縫いとする。1箇所は2列で、上から5段で縫い、さらに筋によせて下から4段で縫い終るようである。他は1列で4段であろう。縫は縫い合せ部分の上下を切欠き、下から1列2段で縫い、さらに横に引出して1段縫いで終る。側板には上端から1.9cmの所に小孔が一つあるが、これと対称の位置は欠損。内面は黒色。3は径20.6cmの底板に側板をつけ、下端に幅3.5cmの縁を巻いて5箇所に木釘を打込む。側板は上部を欠くが、縫い皮の状態から高さ13.5cm前後と思われる。縫いは2と大差ない。側板、縁とも1箇所2列で、それぞれ3段と2段、2段と1段である。側板には2と同様に小孔が一つあるが、他にこれと関連する孔はないようである。内面は黒色。以上のほか底板1点、側板2点、縁3点が出土したが、いずれも残片である。側板、縁各1点には対称の位置に1対の孔があるものがある。

**刀子柄(1)** 残長16.1cm、最大幅2.1cm、最大厚1.4cm。断面八角形で、背側をやや厚くし、柄頭部の腹側を削って幅を狭める。一端に刀子の茎を焼込み、他端近くに斜めの1孔を焼火箸であける。

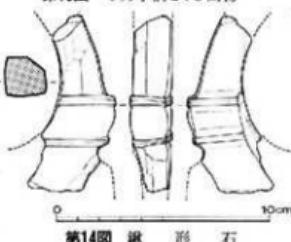
S E015からは曲物底板、縁の残片各1点が出土した。

#### 5 石製品 (第14図、図版11)

**鏡形石** 奈良時代の土器を含む土壤S K013から出土した。残長8.2cm。環体部と板状部の境の部分の破片である。環体は弯曲が強く、板状部はやや上方に反る。節部の両縁には1条の刻線をいれた凸帯がめぐり、板状部の外縁上部に小さな抉りがある。表面はやや風化している。緑色片岩製。鏡形石を廻叢する4世紀後半の古墳が付近にあったのであろうか。



第13図 1刀子柄 2.3曲物



第14図 鏡形石

## V まとめ

今回の調査はこれまでの京内遺跡の大規模な調査が左京で行なわれていたのに対し、右京においてはじめて広範囲に実施したものである。また、調査地が五条四坊三坪にあたり、平城京西端の矢田丘陵に連なる丘陵上にあり、条坊の設定が平地部同様施工されていたかという点も興味深い問題であった。

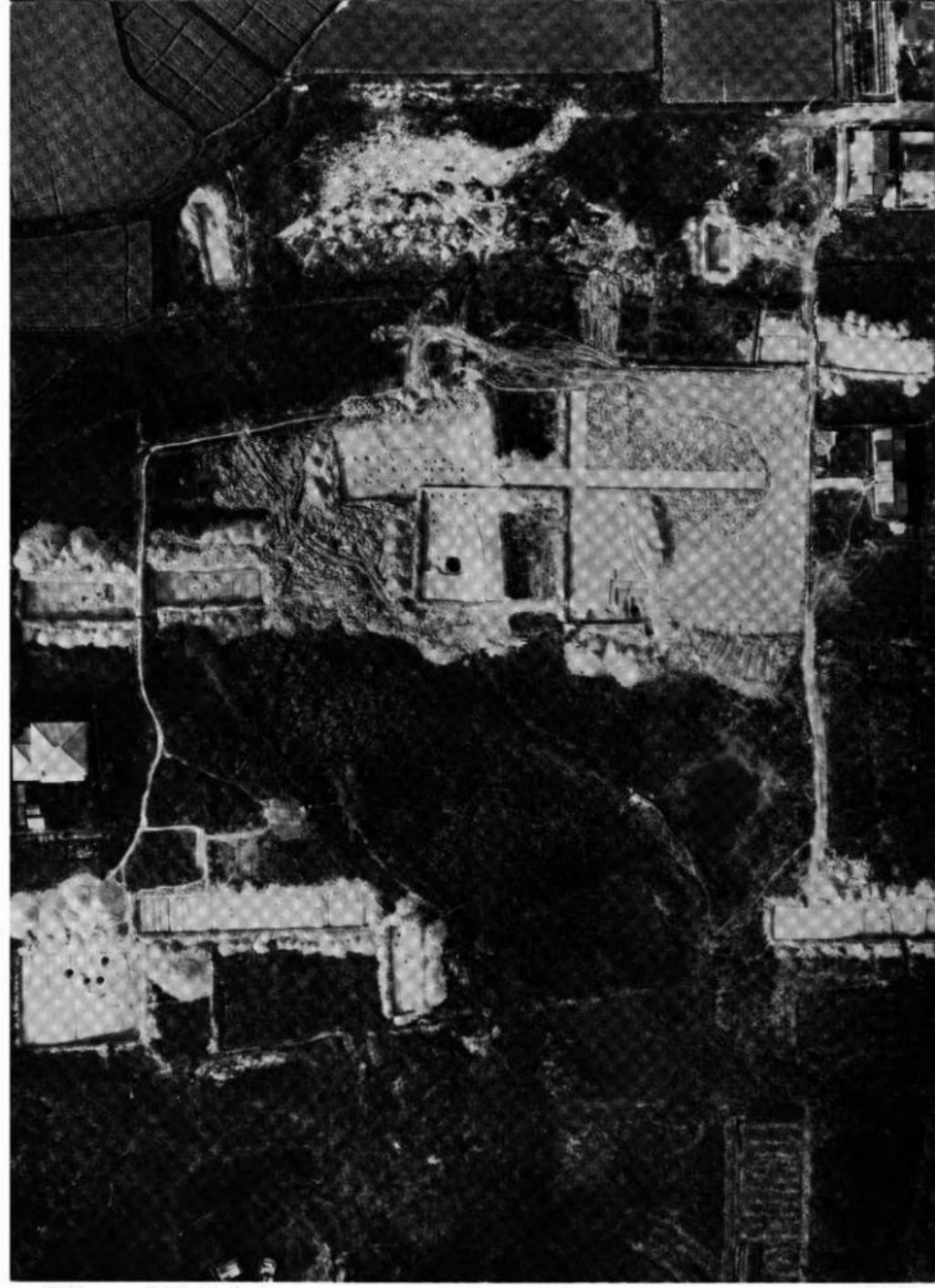
今回の発掘地点は南東より谷が入り込み、丘陵部が半島状に突き出た基部にあたる起伏の多い地形となっている。三坪はちょうど、谷をはさんで北東部と南西部が丘陵上となる地点にあたる。丘陵は標高約80mであり、右京五条一坊の平地部との比高は約20mである。以下、発掘成果をもとに若干のまとめをおこなう。

条坊遺構はトレント発掘による部分的な確認であったが、西三坊大路 S F003、五条条間路 S F008、南北小路 S F039を検出した。とくに西三坊大路東側溝 S D001の方位は、朱雀大路の調査(1974年)で明らかになった平城京造営方位( $N0^{\circ}15'41''W$ )にはほぼ一致し、また、平城京の1800尺の基本方眼地割りにも合致する。この事実は、条坊制の施工が地形の起伏をこえて厳密に行なわれたことを物語っている。五条条間路は通常大路規模と推定されているが、今回検出した路幅は小路と同様2丈であった。しかし、この東方延長上のKトレントでは同条間路は確認できた。

今回の調査は条坊遺構を中心としたため、坪のなかは三坪の北半部分の調査を中心におこなった。検出した建物は6棟で、建物群は谷頭部と北東丘陵上の2つの地域に分けることができる。北東丘陵上は後世の削平により、わずかに建物1棟、井戸1基を残すのみであるが、宅地としては最適な立地条件をそなえている。一段下った谷頭部は谷頭を囲む形で5棟の建物がある。いずれも小規模な掘立柱建物で宅地の中心的な建物ではなかろう。この二つの建物群は、ちょうど坪の東西を二分する位置にある階段状遺構 S X024によって区画され、南北は谷筋によって二分された4坪づつを占める。地形的な制約を受けながらもこのような宅地割りが想定できることは興味ぶかい。なお、建物はA、Bの2時期あるが、出土遺物は8世紀中頃までのものが多数をしめ、また遺構の密度も低いことからも奈良時代後半には宅地としての機能が失なわれたと考えられる。

建物の廃絶後、谷頭部のS B025に接して藏骨器が埋納される。この火葬墓 S X030は、藏骨器が入る程度の小さな掘形に直接納置し、その上面を石で覆う簡単な施設である。藏骨器の中には、墨、筆管、和同開珎が副葬されていた。今回検出した火葬墓は、奈良時代に於ける平城京内出土のものと判明する唯一の例である。また、京内に火葬墓が營まれたことは、前章で述べたように、京城内での埋葬を禁じた養老天寶令と矛盾した現象を示している。今後、資料の増加をまって、検討しなければならない重要な問題であろう。また、通常遺物としては残り類い墨、筆管が出土したことは驚嘆に値しよう。ともに正倉院に伝世品があるものの、奈良時代の出土品としてはじめての貴重な資料である。

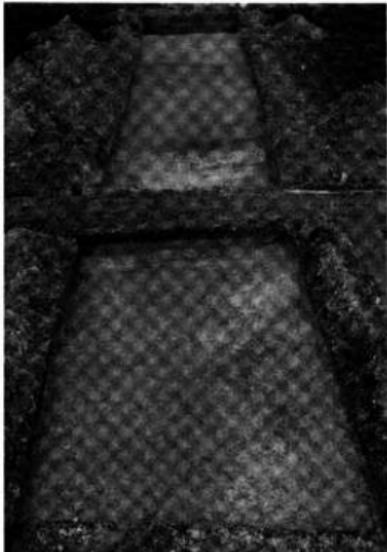
最後に、ここ数年米、京内の調査が増加し、平城京復原へのいくつかの手がかりを得ることができ、その成果が蓄積されつつある。しかし、一方、これらの発掘が開発の事前調査であることを顧みると、今後、より自主的な調査体制が必要となろう。



図版1 発掘区全景

(航空撮影)

図版 2



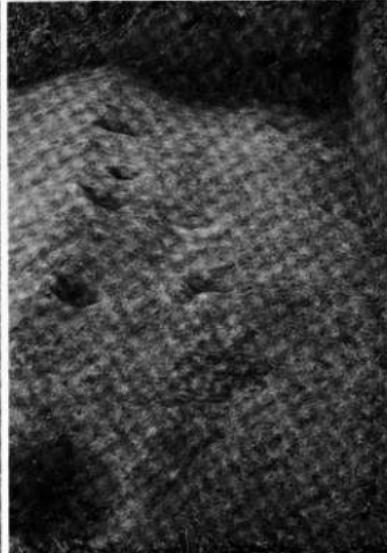
1 I トレンチ西三坊大路 S F003 (西から)



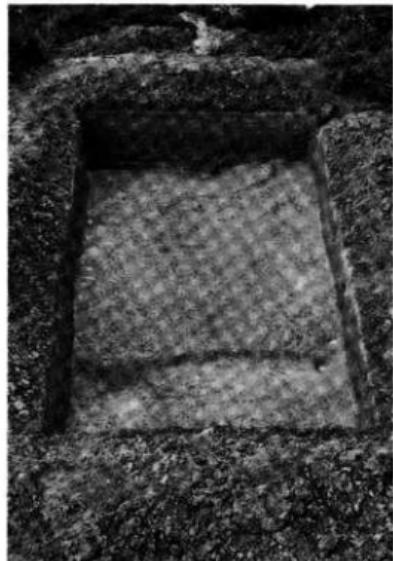
2 J トレンチ西三坊大路 S F003 (西から)



3 西三坊大路西側溝 S D002 (南から)



4 西三坊大路東側溝 S D001 (南から)



1 Hトレンチ条間路 S F008

(南から)

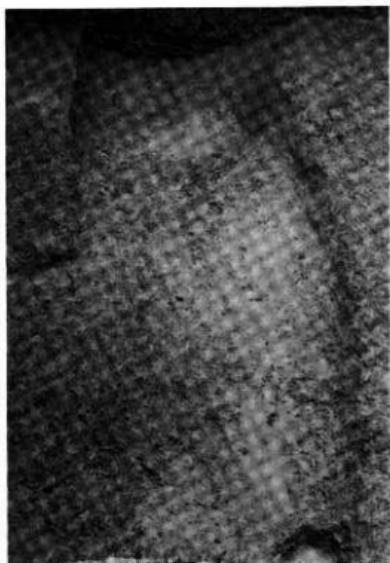


2 南北小路西側溝 S D040, 石組暗渠 S X041(南から)



3 条間路北側溝 S D006

(東から)



4 条間路南側溝 S D007

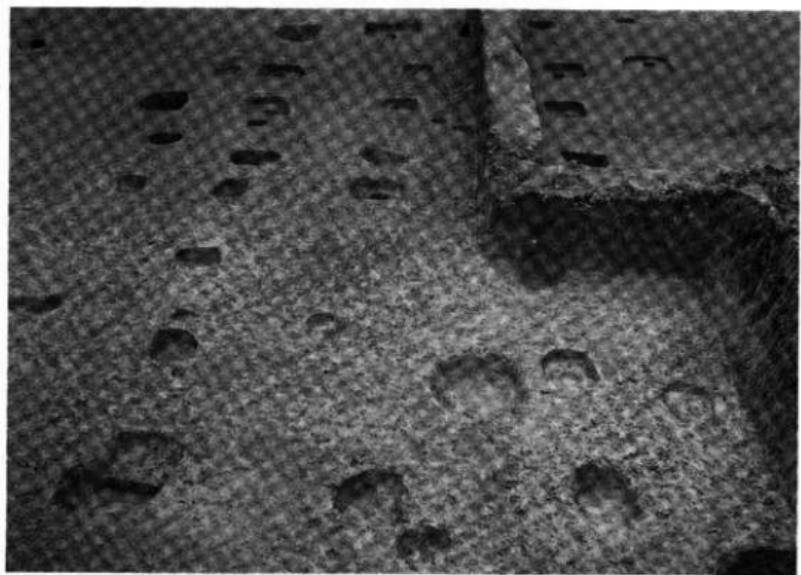
(東から)

図版 4



1 Lトレンチ 建物 S B025・026・027

(西から)



2 建物 S B026・027

(西から)



1 建物 S B025

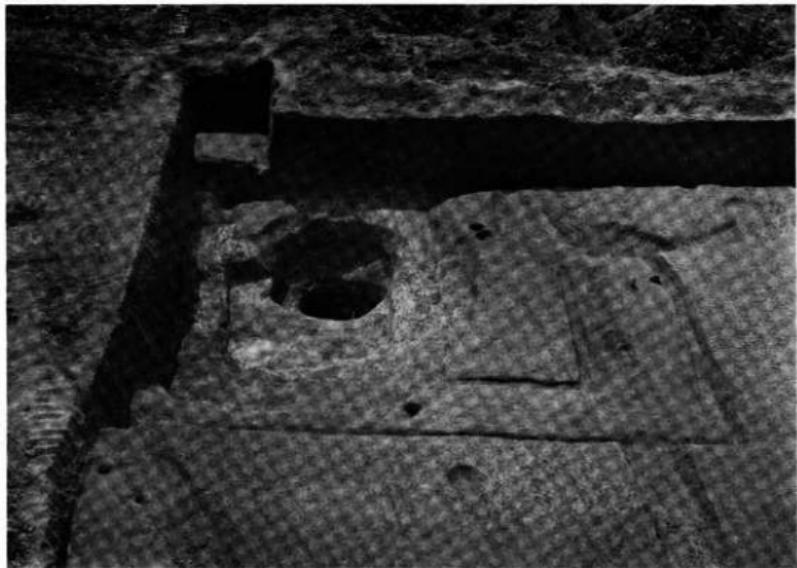
(北から)



2 建物 S B034・035

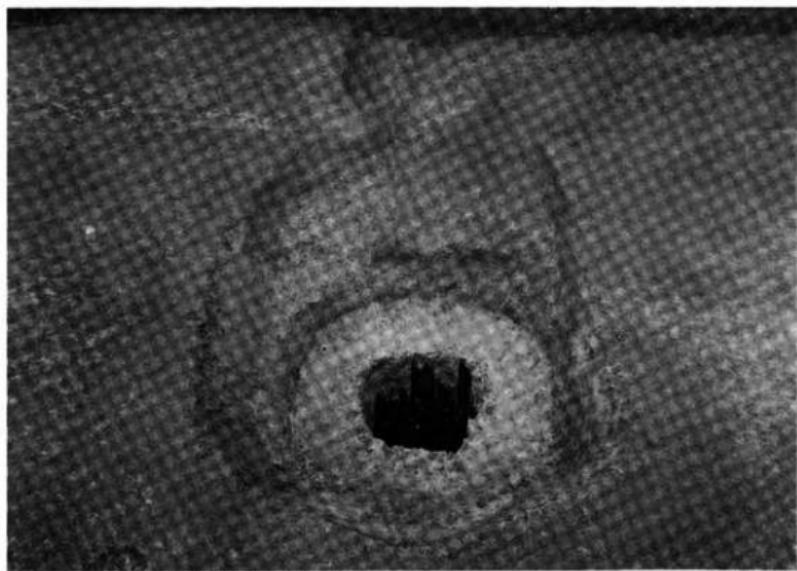
(南から)

図版 6



1 井戸 S E015・S X016

(北から)



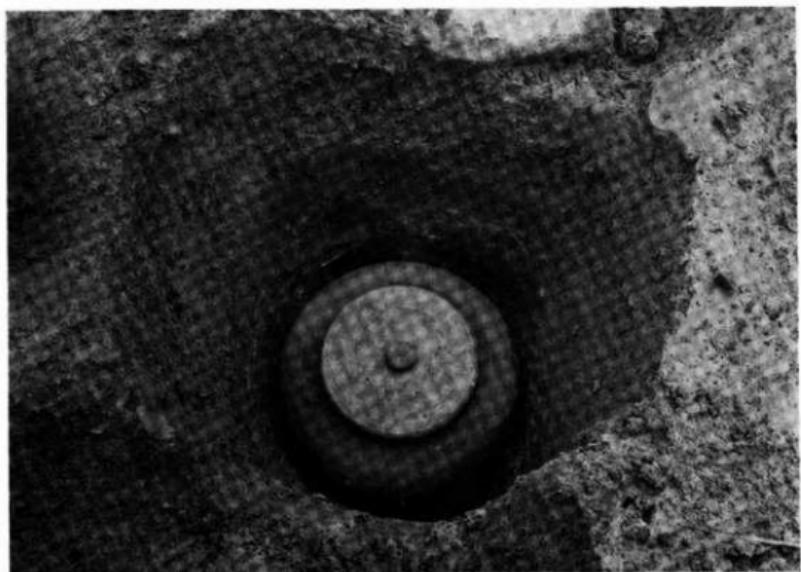
2 井戸 S E020・S X021

(東から)



1 井戸 S E020 遺物出土状態

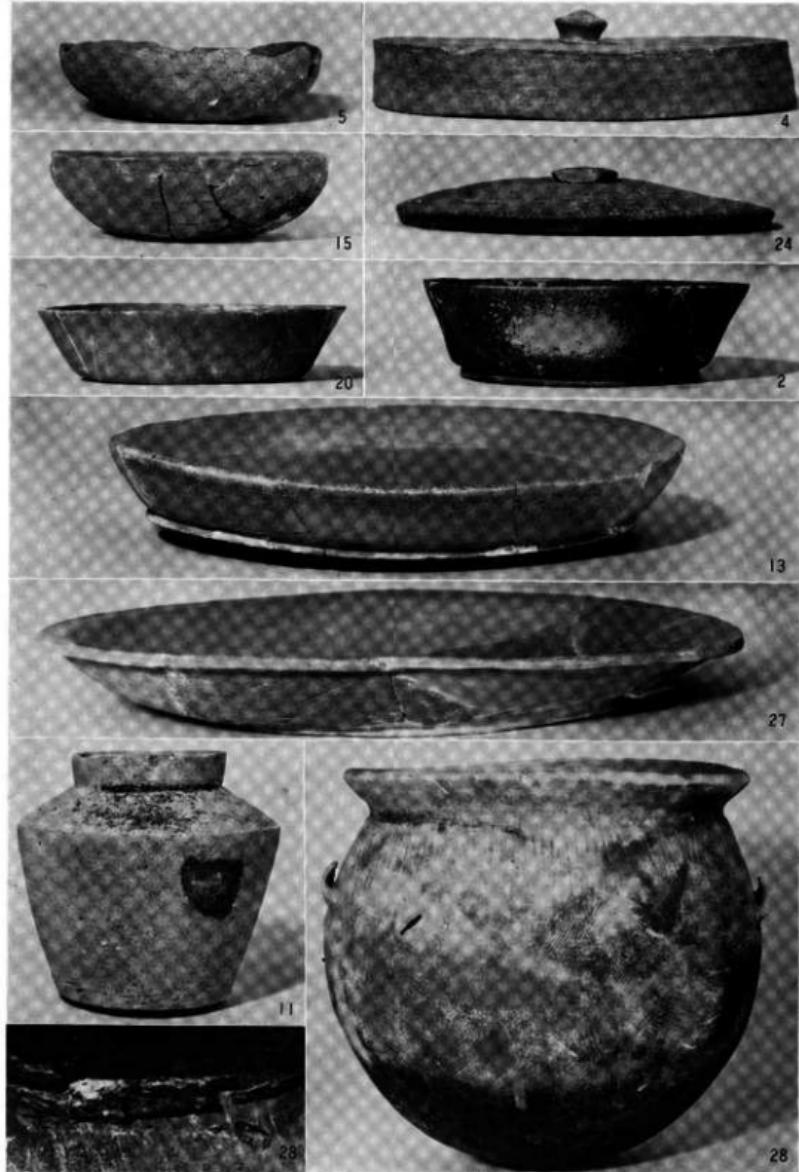
(東から)



2 火葬墓 S X030 藏骨粉出土状態

(西から)

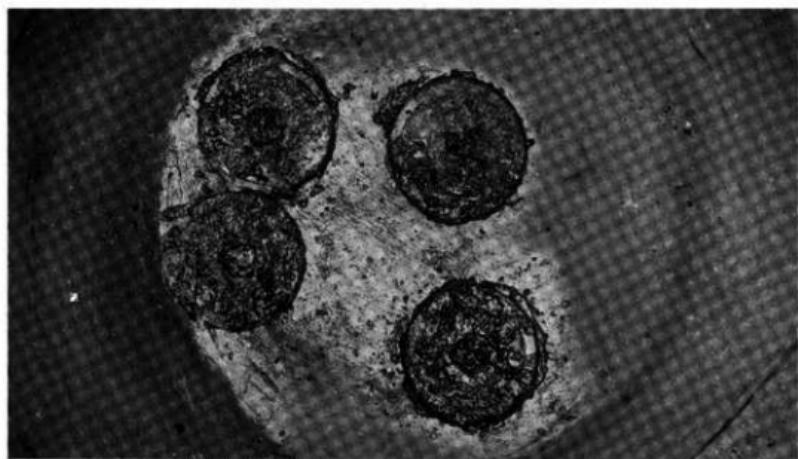
图版 8



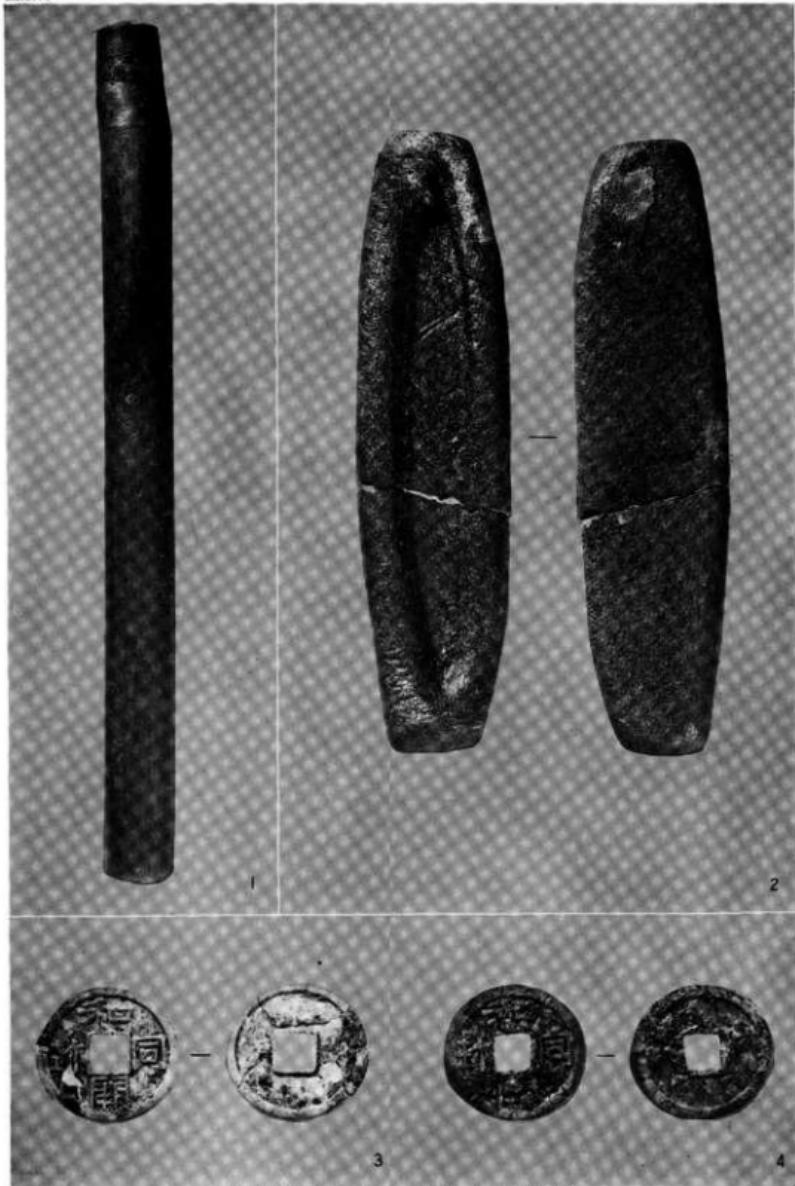
6 AGQ · FG区 出土土器



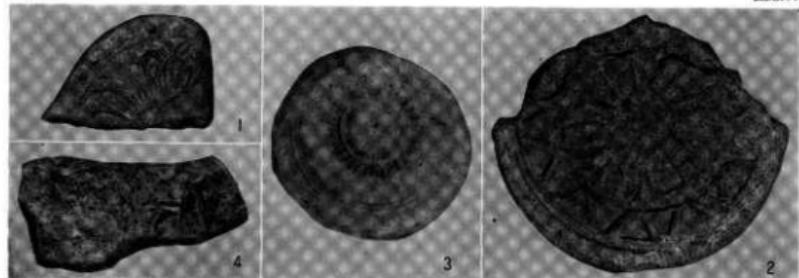
1 火葬墓 SX030 出土 藏骨器



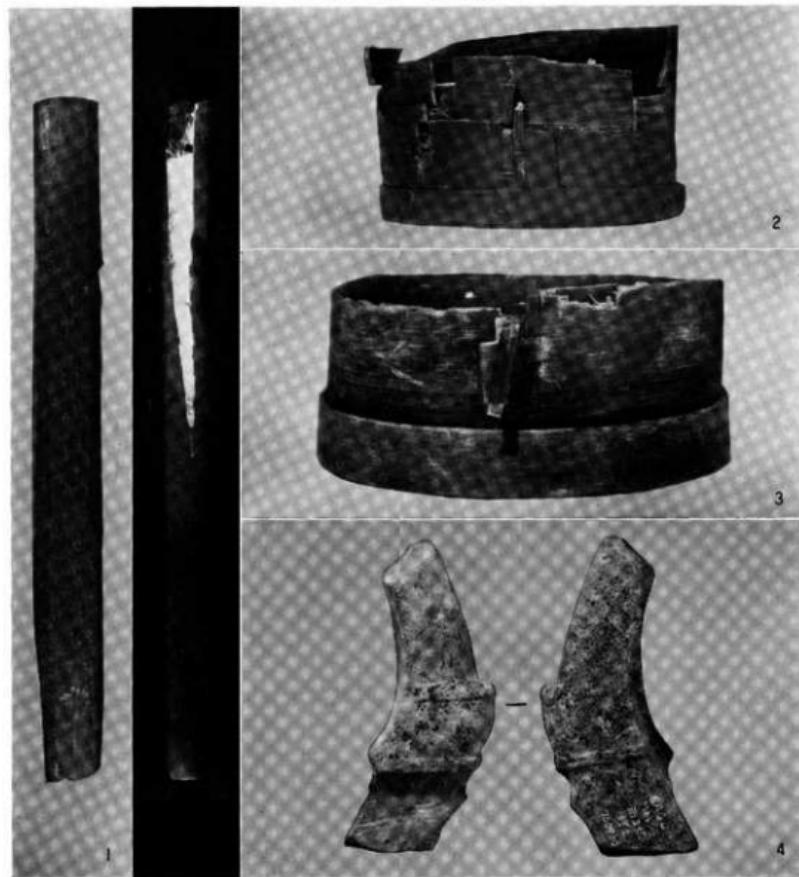
2 和同關珍 銘着狀態



董骨器副葬遺物 1筆管 2墨挺 3.4 和同開珍

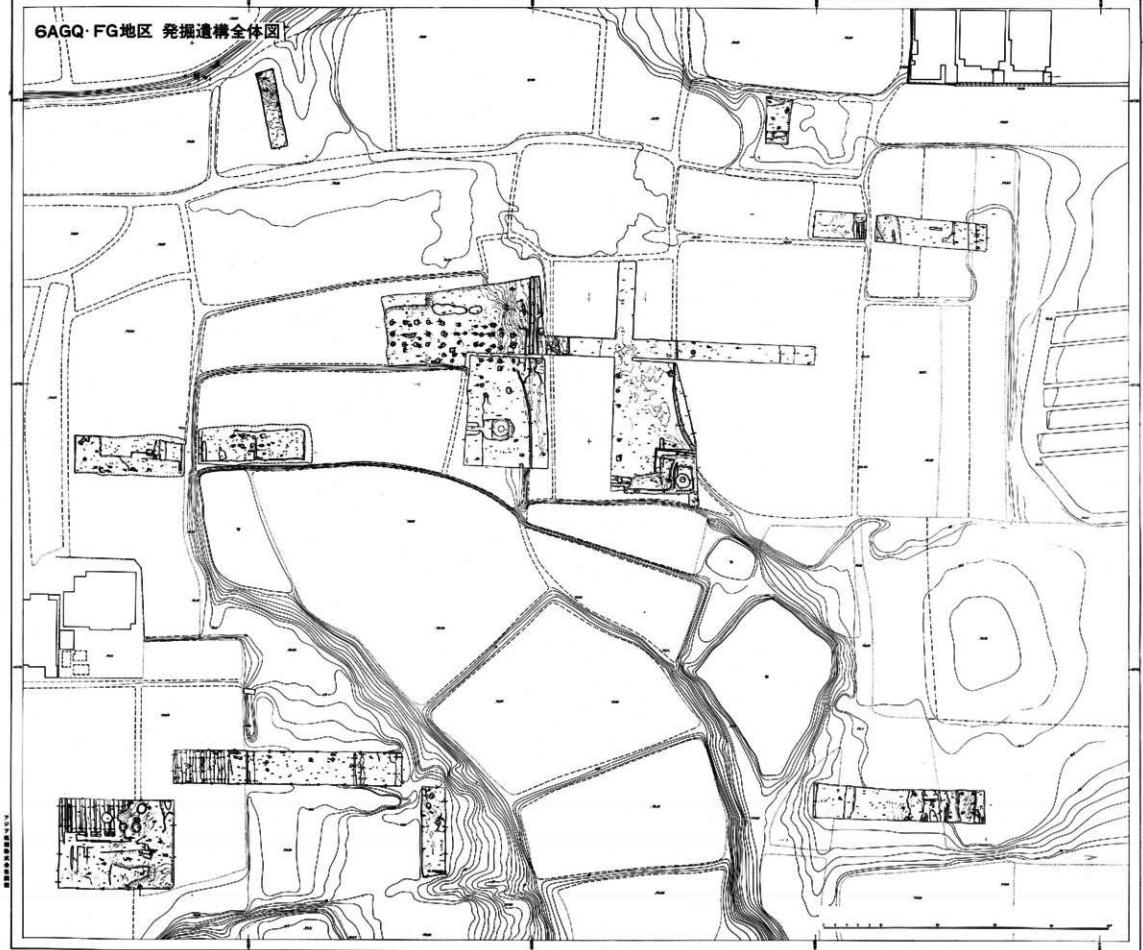


6 AGQ・FG区・出土軽瓦



井戸S E020出土 1 刀子柄（1の右X線透過写真）2,3 曲物・S K013出土 4 穴形石

6AGQ・FG地区 発掘遺構全体図



昭和52年2月10日 印刷  
昭和52年3月31日 発行

平城京右京五条四坊三坪  
発掘調査概報

編集発行 奈良国立文化財研究所  
印刷 共同精版印刷株式会社

